暮らしの視点(2)

既婚女性からみた家族の範囲

― 結婚しても、しなくても家族のままの「息子」や「娘」 ―

主任研究員　北村　安樹子

＜同別居にかかわらず家族であるとする割合が最も高いのは「夫」＞

人は、自身や配偶者の家族や親族に関し、どこまでの範囲を家族だと感じているのだろうか。

国立社会保障・人口問題研究所が結婚経験のある女性を対象に行っている調査ではこの点について「同居・別居にかかわらず家族である」「同居していれば家族である」「同居していても家族とはいえない」の３つの選択肢のなかから回答を求めている。

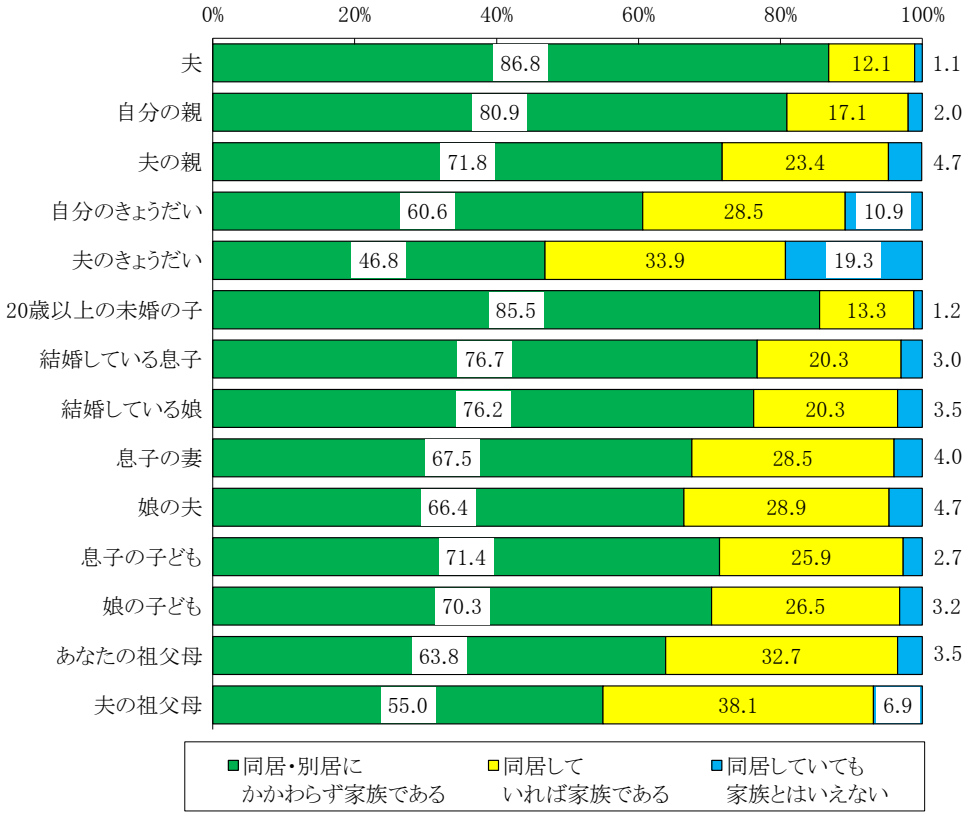
配偶者のいる女性の回答をみると、「同居・別居にかかわらず家族である」と答えた人の割合が最も高かったのは「夫」(86.8%) であり、「20歳以上の未婚の子」(85.5%) がこれに続いている(図表１)。図表であげられた対象のうち、夫と成人した未婚子は、既婚女性からみて同居・別居にかかわらず、一般的に最も家族であると感じやすい存在だと考えられる。

＜「自分・夫の親」「結婚した息子・娘」は「同別居にかかわらず家族」とする人が7割超＞

また、「同居・別居にかかわらず家族である」と答えた人がこれらに次いで高かったのは「自分の親」(80.9%) であり、「結婚している息子」(76.7%)、「結婚している娘」(76.2%)、「夫の親」(71.8%) がこれに続いた。これらの人については「同居していれば家族である」とする人がいずれも２割強を占めるものの、７割超は「同居・別居にかかわらず家族である」と答えており、先に見た「夫」や「20歳以上の未婚の子」に続き、一般的に家族だと考える人が多い対象であることがわかる。

なお、５年前に行われた同じ調査の結果と比較してみると、「同居・別居にかかわらず家族である」と答えた人の割合が最も増えたのは「結婚している娘」(＋5.2ポイント) となっている (図表省略)。「結婚している娘」は、「結婚している息子」(＋3.5ポイント) とともに、同別居にかかわらず、すなわち子が進学や就職、結婚等で親の家をすでに離れた場合にも、家族であるとする人が増えているということになる (図表省略) *[1]。成人した未婚の子と同様に、息子や娘は結婚して以降も家族であり続けるという認識が、既婚女性の間に広がっていることを示す傾向だと考えられる。

図表１　既婚女性が答えた「家族」の範囲



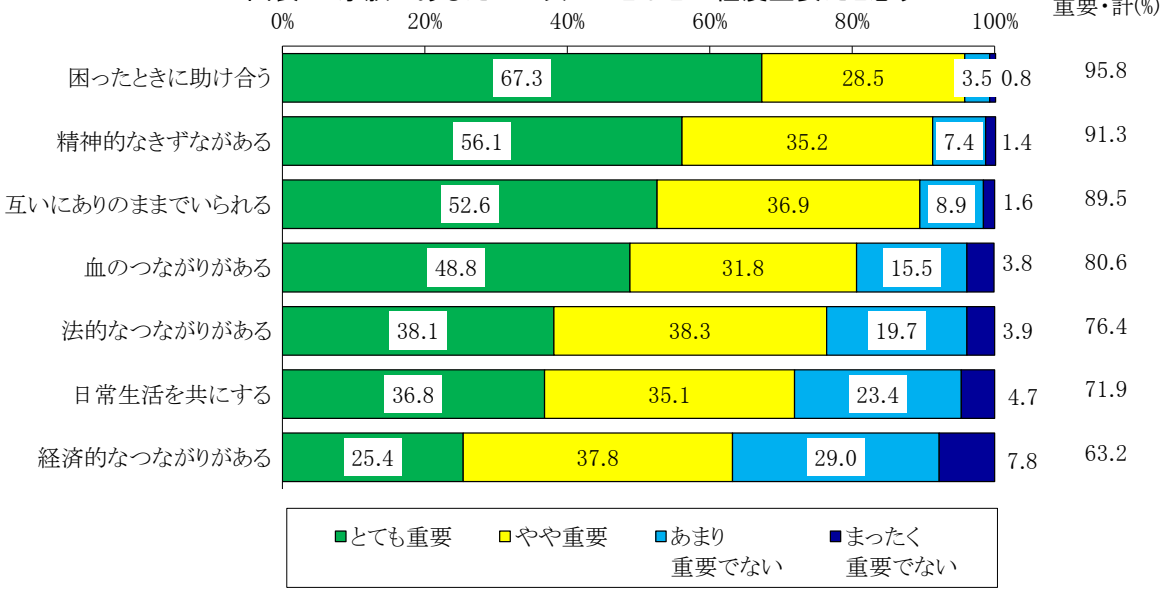
資料：国立社会保障・人口問題研究所『第６回全国家庭動向調査報告書』（2020年３月）より作成
注１：調査対象者は全国の結婚経験のある女性。うち配偶者がいる6,142名についての集計結果から、「不詳」の人を除き再集計した。
注２：設問文は「一般的に、下の欄にあげる人は「家族」の一員と言えると思いますか。一緒に住んでいる場合（同居）と、そうでない場合（別居）を考慮してお答えください。」

＜家族であるために最も重要だと思うことは「困ったときの助け合い」＞

では、回答者が家族であるために重要だと感じている条件には、どのような点があげられているのだろうか。

同じ調査では、血縁関係を示す「血のつながりがある」、同別居にかかわる「日常生活を共にする」のほか、「法的なつながりがある」「経済的なつながりがある」「精神的なきずながある」「互いにありのままでいられる」「困ったときに助け合う」という計７つの側面に関して、家族であるという意識における重要度をたずねている。その結果、重要とした人の割合（「とても重要」「やや重要」の合計割合）が最も高かったのは「困ったときに助け合う」（95.8%）であり、「精神的なきずながある」（91.3%）、「互いにありのままでいられる」（89.5%）がこれに続いている（図表２）。血縁関係（「血のつながりがある」）を重要とした人の割合（80.6%）はこれらに次ぐ４番目となっており、先にあげた支援関係（「困ったときに助け合う」）や精神面のつながり（「精神的なきずながある」）を下回る一方、生活の共同性（「日常生活を共にする」71.9%）や、経済的関係（「経済面のつながり」63.2%）を上回っている。

図表２　家族であるために次のことはどの程度重要だと思うか



資料・注１は図表１に同じ

注：設問文は「あなたにとって、家族であるために、次のことはどの程度重要だと思いますか」。「重要・計」は「とても重要」「やや重要」の合計割合。

＜家族が小規模化する時代における、家族であるという認識の条件＞

少子化や核家族化、単身世帯の増加など生活共同体としての家族の規模が縮小する一方で、支援関係や精神面のつながりをもって家族であるとする認識が広がっていることは興味深い。これらは血縁関係をもたない者との間にも成立しうる関係ではあるが、家族であるという認識の条件として重視されていることになる。見方をかえれば、家族以外の人とのそうしたつながりは希少だと感じる人が増えているということかもしれない。

また、現代の母親世代や祖母世代が過ごしてきた時代は、年金や医療、介護に対する社会的なセーフティネットが確立し、続柄や性別によらず、成人した子と親が各々の住まいや生活空間をもつことが可能になった時代でもあった。このような家族では、各々が自立を前提とする暮らしを営んでいく上で、他者との関係では得難いつながりをもつことが、暮らしの経済性を高めたり、精神的な安寧を得る上で重要になる面があるのだろう。

（ライフデザイン研究部　きたむら　あきこ）

【注釈】

*1　「同居・別居にかかわらず家族である」とする人の割合は、前回調査に比べ「夫」を除くすべての親族において上昇している。上昇幅は、「結婚している息子」より「結婚している娘」、「息子の妻」（＋2.3ポイント）より「娘の夫」（＋4.2ポイント）、「息子の子」（＋2.7ポイント）より「娘の子」（＋4.0ポイント）で大きい（図表省略）。